

平成29年度

少年の主張 島根県大会報告書

第46回 島根県少年弁論大会



日時

平成29年9月27日(水)
10:30～15:30

会場

島根県芸術文化センター
グラントワ 小ホール

主催／青少年育成島根県民会議 島根県中学校長会
益田市中学校長会 独立行政法人 国立青少年教育振興機構
共催／益田市教育委員会
後援／島根県 島根県教育委員会 島根県警察本部
益田市 益田市青少年育成市民会議
島根県PTA連合会 益田市PTA連合会

はじめに

「少年の主張島根県大会」は、明日を担う中学生が、日常生活を通じ、日頃考えたり感じたことを多くの人の前で発表することにより、自立心を育てる機会とし、主張を聞いた中学生は自分の考えを広め、自覚し、大人は中学生に対する意識や行動に理解や関心を深めてもらおうとすることを目的としています。

本年度は46回目を迎え、平成29年9月27日益田市（島根県芸術文化センターグラントワ）で開催しました。当日は、島根県内各地区から選出された17名が、自分自身に関わること、家族、友人、学校や地域のできごと、故郷への思いなどからテーマを見つけ、豊かな感性でとらえた意見を力強く堂々と発表しました。この記録集は、当日の主張を収録したものです。

人は、思いや願いを持つこと、夢を抱くことなどができます。そのことは、生きていく上でとても大切なことだと思います。そしてそれを、文字や言葉に表してまとめてみると、自分を見つめることになり、自分を知り、目標をもって前向きに生きることにつながると考えます。

また、人と共に生きている私たちは、自分の気持ちを人に伝えることが必要です。伝えた人と心を通わせ、手を取り合って生きることが大事です。でも、伝えることは難しく、心を込めて伝える工夫や努力が求められます。

さらに、他の人の思いや考えを聞くことは、その人を知り、その人に近づくことになります。そして自分と違った考えに気づいたり共感して自分を深めることができると信じます。

ぜひ多くの方々にお読みいただき、今後の青少年の育成のためご活用いただければ幸いです。

なお、この機会に、悪天候の中参加し、熱心に聴いてくださった益田市内各中学校の生徒の皆さん、素晴らしいアトラクションを披露してくれた匹見中学校全校生徒の皆さんにも感激したことをお伝えします。

終わりに、審査員の方々、本大会の開催にあたりご指導、ご協力くださいました島根県中学校長会・益田市中学校長会の先生方並びに関係の皆様にも、心からお礼申し上げます。

平成29年12月

青少年育成島根県民会議
会長 吉長 義親

目次

はじめに

大会風景…………… 2

出場者のみなさん…………… 4

審査結果表…………… 7

発表作品…………… 8

開催要項…………… 25

市郡大会概要一覧…………… 26

アトラクション紹介／平成28年度（昨年度）の受賞者…………… 27

全国大会出場者・審査結果…………… 28

全国大会「内閣総理大臣賞」受賞作品…………… 29

あとがき

大会風景



開会式（会場：島根県芸術文化センター グラントワ小ホール 益田市）



聴衆席風景（前方：来賓及び審査員席）



青少年育成島根県民会議会長あいさつ



島根県知事あいさつ（代読：益田児童相談所長）



益田市市長あいさつ

出場者のみなさん

午前の部：9名



①出雲市立南中学校3年
奥井 寛太



②松江市立湖東中学校3年
阪本 華



③益田市立益田中学校3年
上田 幸花



④雲南市立大東中学校2年
永井 宏樹



⑤益田市立西南中学校3年
豊田 麻桜



⑥邑南町立石見中学校1年
奥村 芽唯



⑦安来市立第二中学校3年
安部 直人



⑧奥出雲町立仁多中学校3年
藤原 蘭



⑨浜田市立浜田東中学校1年
小寺 真羽

午後の部：8名



①飯南町立赤来中学校2年
小野 舞子



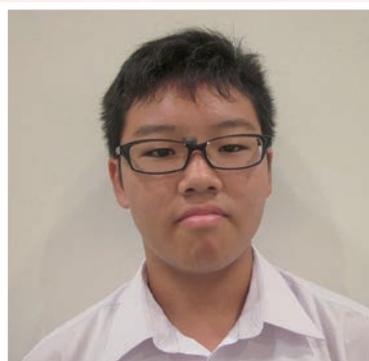
②海士町立海士中学校3年
井手上 漠



③益田市立真砂中学校3年
瀧谷 瑠音



④出雲市立斐川東中学校3年
高木 梨奈



⑤江津市立青陵中学校3年
押越 広宇紀



⑥津和野町立津和野中学校2年
松浦 幸美



⑦島根大学教育学部附属中学校3年
田中 歩人



⑧大田市立大田西中学校1年
林 芽生



記念撮影



アトラクション



島根県中学校校長会長あいさつ



島根県知事賞授与



島根県教育委員会教育長賞授与



島根県警察本部長賞授与



青少年育成島根県民会議会長賞授与



優秀賞授与

平成29年度「少年の主張島根県大会」審査結果表

賞名	演題	地区	学校名	学年	氏名
島根県知事賞	カラフル	隠岐	海士町立海士中学校	3	井手上 漢 <small>い で がみ ばく</small>
島根県教育委員会教育長賞	多くの足音	益田	益田市立西南中学校	3	豊田 麻桜 <small>とよた まお</small>
島根県警察本部長賞	忘れちゃいけん	鹿足	津和野町立津和野中学校	2	まつうら 幸美 <small>まつうら こうみ</small>
青少年育成島根県民会議会長賞	父が教えてくれたこと	大田	大田市立大田西中学校	1	はやし 芽生 <small>はやし めい</small>
審査員特別賞	かくれんぼ	益田	益田市立真砂中学校	3	たまたに 瑠音 <small>たまたに るお</small>
//	障がい者で何がわるい？	松江	島根大学教育学部附属中学校	3	たなか あゆと 歩人 <small>たなか あゆと</small>
優秀賞	小さな教室から広がる世界	出雲	出雲市立南中学校	3	おくい 寛太 <small>おくい かんた</small>
//	「ふつう」とは何か	松江	松江市立湖東中学校	3	さかもと はな 華 <small>さかもと はな</small>
//	私の器	益田	益田市立益田中学校	3	うえだ さちか 幸花 <small>うえだ さちか</small>
//	言語の壁	雲南	雲南市立大東中学校	2	ながい ひろき 宏樹 <small>ながい ひろき</small>
//	本当の友達とは	邑智	邑南町立石見中学校	1	おくむら めい 唯 <small>おくむら めい</small>
//	世界に響け我らの安来節	安来	安来市立第二中学校	3	あべ なおと 直人 <small>あべ なおと</small>
//	新しい自分になるために	仁多	奥出雲町立仁多中学校	3	ふじはら らん 蘭 <small>ふじはら らん</small>
//	願い	浜田	浜田市立浜田東中学校	1	こてら つばさ 真羽 <small>こてら つばさ</small>
//	家族がいることの幸せ	飯石	飯南町立赤来中学校	2	おの まいこ 舞子 <small>おの まいこ</small>
//	今 私にできること	出雲	出雲市立斐川東中学校	3	たかぎ りな 梨奈 <small>たかぎ りな</small>
//	地平線	江津	江津市立青陵中学校	3	おしひえ こうき 押越広宇紀 <small>おしひえ こうき</small>



全国大会 文部科学大臣賞 島根県知事賞

カラフル

海士町立海士中学校
3年 井手上 漠

昔から女の子のする遊びが楽しくて自分に合っている気がしていました。サッカーをするよりお人形で遊ぶ方が何倍も楽しかったです。

そんな僕が「自分は人とは違う。変わっている」と気がついたのは小学校高学年の頃でした。

「気持ち悪い。」

いきなり、耳を疑うような言葉が僕の耳に飛び込んできました。え、僕のこと？僕のどこが気持ち悪いの？

その日から僕は周りから変な目で見られているように感じました。そこから、少しずつ自分を変えようと思いました。肩まであった長い髪をバッサリ切って、なるべく周りの男子に合わせました。鏡を見る度、理想の自分ではない自分が映っていて本当に辛かったです。

けれどそのときの僕はありのままの自分ではいられなかったのです。楽しくはなくてもできるだけ男子と関わろうとしてみました。無理をするのは思っていたよりも何倍も何倍も苦しかったです。色のない、白黒の毎日でした。

そんな僕を認めてくれたのは母でした。

母は言いました。

「漠は漠のままでもいいんだよ。それが漠なんだから」と。

無理をして固くなっていた心が解けていくように感じました。母は僕のすべてをわかってくれていました。女の子と遊ぶ方が落ちつくことも、髪が長い方が自分らしいと思っていることも、そして、そんな自分は変わっていると悩んでいることさえも…。

母が味方でいてくれるなら僕はありのままの僕でいよう、周りの目なんて気にしない、自分らしくいよう、母のためにも楽しく生きようとして強く強く思いました。

その日から僕は自分らしいしゃべり方で自

分らしい仕草で自分らしい毎日を送っています。自分らしく堂々と生きていくと自然と友達も僕を理解してくれ、楽しく話せる人も増えていきました。僕の世界が少しずつ色づき始めました。僕のことを変な目で見ていた人たちとも今では仲よくなっています。母の愛情のおかげです。

僕には将来の夢があります。それは美容師になることです。成長するにしたがって、僕は美容やファッションに興味を持ち始めました。雑誌を読んで研究することも大好きです。今は自分を美しくすることに夢中ですが、将来は人を美しくする、そしてたくさんの人に喜んでもらいたいと思うのです。

もし今、ありのままの自分を認めることができず、悩んでいる人がいたら僕は伝えたい。あなたはこの世界にいななければならない人だということを。

世の中にはいろいろな人がいます。自分と同じ人間は世界中どこを探してもいません。考えることも好きなことも大切なことも一人ひとり違うのです。一人ひとりが違うからこそ、相手に興味がわき、もっと知りたいと思ったり、愛しく思えたりするのではないのでしょうか。

雨上がりの空にかかる虹が美しいようにさまざまな色が輝き、調和すればこの世界はもっと美しくなると思うのです。一人ひとりが自分を自由に表現できる世界。そんなカラフルな世界を一緒に作っていきましょう。



島根県教育委員会教育長賞

多くの足音

益田市立西南中学校
3年 豊田 麻桜

私は、小学校の1年生から9年間、稲作をしています。小学校での田植えと稲刈りは、私にとって特別な日で、楽しい体験でした。

中学生になると、粃まきから始まり、代掻き、草抜き、脱穀、袋詰めなど粃から製品になるまでの工程を体験することができて、『西南米』として、広島で販売するときも、「私たちが育てたお米」と自信を持ってお客さんに売ることができました。

3年生になり、私は稲作りリーダーになりました。今年も、苗床を作って、粃をまき、稲作が始まりました。苗が目を出したらカバーをかけ、保温しますが、暑すぎると苗が焼けてしまうので、時には開けておかなければなりません。水は毎日与え続けます。

私は、毎朝学校に来ると、苗の土が乾いていないか確認して、乾いていたら水をあげました。土日でも家が近い人が当番で水をあげに行きます。当番制だったはずが、結局、毎週土日は私と妹で水やりに行っていました。でも、日曜日、部活がない日は遅くまで寝たいという気持ちがあって、「1日くらいあげんでもいいか!」と、1日だけ水やりをさぼりました。次の日の朝、学校でカバーをめくってみると、芝生のように柔らかかった苗が、松の葉のようにとがってしなびていたのです。(昨日ちゃんと水やりに来ればよかった。私のせいでこんなことになってしまった)と後悔でいっぱいでした。去年暑い日が続いて田植えの日に茶色く背の低い苗を植えることになってしまったのが、思い出されました。その日は、とにかく水をたっぷりあげてから家に帰りました。次の日の朝、祈るような気持ちで苗をのぞいてみると・・・元通りに復活していたのです。ものすごく安心しました。もう、絶対に水やりをさぼらないと決めました。

苗は、大きく育ち、無事に田植えの日を迎えました。田植えには、たくさんの方々の地元二条地域の方々が手伝いに来てくださいます。私

は今まで、足がはまったとか、ヒルに血を吸われたとか、自分のことにばかり目が向いていたのですが、今年は、周りの人を見る余裕が持てて、本当に田植えが難しいところは、そういう手伝ってくれる方々がしているということにもようやく気が付きました。例えば、田植えがしやすいように水は少なくしてあったし、あぜ道の草もきれいに刈ってありました。きっと、お世話をしてくれている農業法人、横尾衛門の方々が予めしておいて下さったのに違いありません。私は、自分たちが育てた稲だと思っていたけれど、本当は、ずっと支えていてくださったのです。

私は、ふいに、ある言葉を思い出しました。学校の畑作りも指導に来てくださる私たちのちょっと先輩で地元で農業をしている豊田さんの言葉です。それは「野菜だって生き物だから、しっかりお世話をしあげんといけんよ。野菜は人の足音を聞いて大きくなるんだから。」というものです。今年、自分が頑張らなければという気持ちで稲作をしてみても、稲の成長がとても気になるようになりました。そうしたら初めてたくさんの方が気にかけてくれていることに気づきました。西南米は「私たちが育てたお米」ではなく、「私たちも育てたお米」。多くの人の足音を聞いて、大切に育てられたお米なんだと思うようになりました。

稲作を9年間続けてわかったことがあります。まずは、本当に大切なのは、田植えや稲刈りといったイベントではなく、毎日のお世話をつづけることだということです。もう一つは、自分でできたと思うことの後ろには、多くの人の支えがあるということです。しかも、さりげなく支えてくれているのです。私にはまだ気づけていないたくさんの方々の支えがあると思います。その一つ一つに気づいていきたいです。そして、ふるさと二条の人たちのように、今度は私が誰かを支えられるようになりたいです。



島根県警察本部長賞

忘れちゃいけない

津和野町立津和野中学校
2年 松浦 幸美

90cm、私の腰の高さくらいです。縦90cm、横90cm、高さ90cmの立方体の木の箱。これが何か分かりますか？ これは、拷問に使う檻で3尺牢といいます。

今年の5月、野外活動で郷土館に行った時、知りました。明治時代、禁教令により長崎から津和野町に送られてきた隠れキリシタンは、153人でした。「信仰を棄てなさい」と、拷問まで行われたことを知りました。少ない食事、真冬の池につけるなど驚くことばかりです。その中の一つに、3尺牢を使った箱責めがあったのです。

私は箱の中に入った感覚がどうしても想像できず、段ボールを使って90cmの立方体の箱を作って入ってみました。お尻をつけて座ることはできましたが、しゃがむのは無理でした。人が一人入るにはとても狭いのです。少したつと、体のあちこちが痛くなりはじめ、「早く出たい！立ちたい！」と叫びたくなりました。何よりも気持ちが辛くて、5分が限度でした。どうしてこんな拷問を考えたのか、拷問を受けた人たちの気持ちはどうだったのか、もっと知りたくて、もう一度郷土館に行きました。

私はわかったことを、夢中で先生に話しました。「先生、この箱の中では、立てません、しゃがめません、横にもなれません。私たちが普段していることが何一つできないんですよ。この中に入り続けていたら、私、心が壊れてしまうかもしれません。でも20日も耐えていた人がいたんですよ。すごく辛かったと思います。」

黙って耐え続けた信者を思うと、あまりにもかわいそうになり、「でも、なんで自分の考えにこだわるんですかねえ。考え変えたら楽になるのに。」と思わず言ってしまいました。

すると先生は少し黙った後「拷問を受けている人が悪いの？ その考えだと、そんなや

り方する人を許すことになるんじゃないの？」と言われ、あーっと思いました。そうだった。こんな卑怯な方法で無理やり考えを変えさせようとしている人たちが悪いのに。私はもう少しで間違った方向に流れてしまうところでした。

私たちの現実の生活の中ではどうでしょうか。ニュースを見ると私は思います。自分と違うからって差別する、自分の思いどおりにならないから暴力をふるうなんておかしい。一人一人の思いや考えが違うのはあたりまえです。

でも私にもありました。違う考えが出た時「それ、おかしいよね」と陰で言ってしまったこと。でも今は「違ってもいいじゃん」と言えるようになりました。

私はこの春、今私が住んでいる小京都と呼ばれる津和野の町に、悲しい歴史があることを初めて知りました。その時亡くなった方に捧げる乙女峠祭りが長年続いているのは、人が人を大切にすることを忘れてはいけないという津和野の人の思いが続いているからだと思います。

もしかしたら、された人だけでなく、拷問をした人たちも苦しかったのかもしれない。そんな悲しい出来事をなかったことにしてはいけないという思いを強く感じます。

今は平和な時代、何でも言える、何でもできる時代です。だからこそ流されず、自分の思いをここ（胸）にしっかりと持ちたいと思います。

違ってもいい。自分と違う意見を受け止める。それを、忘れちゃいけない。



青少年育成島根県民会議会長賞

父が教えてくれたこと

大田市立大田西中学校
1年 林 芽生

お父さんへ。
今どこにおる？
天国で何しとる？
毎日、芽生のことを見てくれとる？
お父さんがおらんくなってさみしいよ。
最後の1週間は医大の集中治療室の中だったけど家族みんなで過ごせたね。
最後に家族で写真が撮れてよかったね。写真は、今、リビングにかざってあるけんね。
お母さんがさみしがっているから、たまには夢に出てきてあげてよ。
私の父は、今年の4月5日に天国に旅立ちました。急性リンパ性白血病でした。
ある日、父は関節の痛みを訴えました。母が何度も「病院に行って」と言っても、頑固な父は病院には行きませんでした。痛みが強くなり、ようやく病院に行くと医師から「急性リンパ性白血病」という病名を告げられました。
この日から、父の闘病生活が始まりました。父の入院する部屋は無菌室のため、子どもの入室は禁止されていました。私も妹も、何ヵ月も父に会うことができませんでした。私は悲しくはありませんでした。なぜなら、父のことが大きらいだったからです。
「お父さんとお母さんどっちが好き？」と聞かれると、いつも「お母さん」と答えていました。

父が、元気だったころ、私は父に毎日叱られていました。賞状をもらっても、ほめてくれるのは、いつも母でした。父にほめられたくて、テストでよい点を取っても、ほめてくれることはありませんでした。私は、だんだん父のことが苦手になっていきました。

父の容体が悪化し、兵庫の医大に転院したため、私と妹は母と離れ、仁万で叔母と暮らすことになりました。父に治ってほしい、元気になってほしいという気持ちはあるものの、なぜ私たちがいろいろがまんをしなければいけないのか、全て父のせいじゃないか！と父を責めました。

闘病生活の中で、父に会えたのは、ほんの数回でした。痩せて弱っていく父でしたが、会いにいくと私の手を握り「お父さん、がん

ばるけんね。必ず家に帰るからね。」といつも言っていました。

4月5日。精一杯病氣と闘った父は、家族に見守られながら、その生涯を終えました。

父は、闘病中、私や妹の心配ばかりしていたそうです。父の携帯電話には、幼いころの私の写真がたくさん保存されていて、私からの手紙も、すべて大切に保管されていました。私は、このとき、初めて父の優しさを知ったのです。

考えてみると、今まで父に叱られてきたことは、今、「芽生ちゃん、よくできるね」と、みんなからほめられることばかりです。いつも「きれいな字を書きなさい」と厳しく言われていたけれど、今では「字が上手だね」とみんなに言われます。父の厳しさは、全て、私のためだったのだと思うと、涙があふれました。そんな大切なことに、父の死から気づいたと思うと、くやしいです。

今、私が、みんなに伝えたいこと。それは家族と過ごす時間は当たり前ではないということです。一緒にご飯を食べたり、たわいもない会話をしたり、ケンカをしたり、そんな普通の生活がある日突然壊れることを想像してみてください。家族と過ごす時間には限りがあります。その限られた時間を大切にすることで、家族の気持ちは通じ合えるのです。

私の父は、すごい人です。どんなにつらい治療も逃げずに、がんばる人でした。症状が悪化しても、決してあきらめず、最後まで病氣と闘った人でした。自分のことより家族のことを心配できる、やさしい人でした。あんなに嫌いだった父を、今ではとても尊敬しています。

父の人生は34年という短いものでしたが、一日一日を精一杯生き抜いた凝縮された人生だったと思います。

自分の病氣と真っすぐに向き合い、最後まで闘い抜いた父の姿。それは私に、何ごとも逃げずに、弱音を吐かずに、自分の人生をしっかりと歩いていく大切さを教えてくれました。人生は、一度きりです。一日一日を大切に、今できることを精一杯、自分の力で、一歩ずつ、がんばっていきたいです。いつか父に、胸を張って言えるような人生を。



審査員特別賞

かくれんぼ

益田市立真砂中学校
3年 瀧谷 瑠音

♪ 嫌われることが怖くて
僕は僕は僕を隠した

これは、「ハイドアンドシーク」という歌の1節です。人に嫌われることをおそれて心に仮面をかぶり、本当の自分を隠そうとしている少年の姿が浮かびます。そしてこの少年は、まさに私。そう感じたのです。

小学生の頃の私は、にぎやかな所よりも、静かな所が好きな子でした。誰もいない図書館で一人、本を読んでいると、とても落ち着きました。でも、友達から「遊ぼう!」と言われると断れなくて、いつも遊んでいました。時々、「一人でいたいなあ。」と感ずることもありましたが、「本ばかり読んでいる、暗い子」と言われるのが怖くて、我慢をしていました。そうしているうちに、いつのまにか私は、周りの人から「明るくて、元気な子」と言われるようになっていました。別に、嫌というほどではありませんでしたが、「本当はそうじゃないのにな」と思っていました。

『この私は本当の私なのだろうか?』

何日か考えましたが、小学生だった私には答えを出すことができませんでした。

「もういいかい」「まあだよ」

それから数年が経った今、本当は引っ込み思案な私が、生徒会長をしています。全校生徒5人の中で、たった一人の女子である私は、休み時間に誘われれば、やっぱり全力でドッジボールをしています。そんなとき、この歌と出会ったのです。

『ああ、今の私は本当の私なのだろうか? 周りの人から見た私を演じているだけで、本当の私は隠したまま。欲しいものがあったも人に譲り、ゆっくりしたいときも、誘われたら断れない私。』

悩み始めてふと、心の授業のことを思い出しました。「ジョハリの窓」という言葉とともに、自分のイメージについて、四つの見方があるということを学びました。

一つ目は自分だけが知っている私。二つ目に周りの人から見た、私にはわかっていない私。三つ目が自分からも周りからも見えている私。そして四つ目にまだだれからも知られていない私。

私は、「自分だけが知っている私」を、他の人には見せたくありませんでした。本当の自分は隠し通してきました。でも「ジョハリの窓」や「ハイドアンドシーク」の歌と出会って、考え方が変わりました。自分の思う本当の「私」を隠さなくたって、周りの人はバカにしないし、からかったりもしないのだと知りました。

「静かな所が好きな私」それだけが本当の私だと思っていましたが、周りの人から見た、「明るくて、元気な子」も、本当の私なんだ。見方を変えれば、自分の違う一面も見えてくるのかもしれない。

「今日は私、一人で本を読みたい。」

たとえば、そんなささやかな一言、ちょっとした行動も、私にとっては大きな勇気のことです。でも、自分だけが知っている私、という窓を少し開けて、かくれんぼしていた私を出してあげたら。

中学校を卒業したら、同級生は多分、百倍くらいになります。社会に出たら、もっと多くの人と出会うでしょう。時には今のような「かくれんぼ」が必要なこともあるかもしれませんが、でも、周りからどう思われても気にせず、自分らしさを出していく私にもなっていきたいのです。

「もういいかい」「もういいよ」

多分、皆さんにもいろいろな一面があると思います。その一つ一つの面を大切にすれば、本当の「自分」というものが見つかると思います。あなたの心の中にある「自分」を隠さないでください。

♪ かぶった仮面を外して
僕は顔を顔を見せてく。



審査員特別賞

障がい者で何がわるい？

島根大学教育学部附属中学校
3年 田中 歩人

「うわっなにやってんのあいつ。障がい者みたい、マジキモ。」

皆さん障がい者という言葉で人をののしったことがありますか。聞いたことのある人も少なくはないと思います。障がい者で何か悪いですか。全く何も悪くないと思います。では、なぜ障がい者にそのような偏見をもつのでしょうか。

話は変わりますが、ダウン症候群を知っていますか。ダウン症候群とは、体細胞の21番染色体が1本余分に存在し計3本となることで発症する先天性疾患群。と載っています。といっても分からない人が多いと思います。要するに発育が一般の人よりも遅くなる障がい者です。僕の弟はこのダウン症候群を患っています。もちろん発育が遅いです。もしかしたら、そのような症状によって多くの人には偏見をもつのもかもしれません。しかし、それが弟の全てではありません。弟は人を笑顔にさせる術をもっています。障がいを抱えて楽しく生活しています。誰だって、得意・不得意はあります。障がい者は、不得意さが病気などによってより大きくなっただけに過ぎないのです。だからこそ、それを理解せず偏見一つでその人全てを否定している私たちに問題があるのではないのでしょうか。

そこで、考えてもらいたいのが、もし家族の一人が障がい者だったらということです。先に述べたように僕の弟は障がい児です。また、両親は福祉施設で働いています。そのため、小さい頃から、障がいに触れ、たくさんの障がい者と交流をし、障がいについて考えてきました。一人、障がいをもった弟が家族にいただけで、沢山のことを経験することが

できました。弟の存在は、僕の障がい者に対する考えを深めたと言っても過言ではないでしょう。だから声を大にして言いたいのです。絶対に障がい者という言葉が悪口の一つとして使わないでもらいたいのです。先日、「あの人障がい者じゃないですか。」と陰口を言っている人を見ました。その時は、すぐに何も言うことができませんでした。また、言い返す勇氣もありませんでした。こうなると、僕も言った人と同じです。自信をもって、その発言は障がい者に対する偏見・差別であり、「止める」と言うべきだったと思っています。この時、そばで聞いていた友達は「それはない。」とはっきりと否定し注意しました。なぜ自分がいえなかったのか。くやしかったです。でも、嬉しかったです。僕は確信しました。周りの人の意識が変われば、障がい者という言葉が人を中傷する言葉でなくなるのです。

普通の人も、障がいをもった人も同じです。それでも、偏見は生まれます。それは間違った考えを信じるからです。どうか正しい考えを理解して下さい。どうか、障がい者を広い目で見てください。そうすることで、きっと、偏見は無くなると思います。



優 秀 賞

小さな教室から広がる世界

出雲市立南中学校
3年 奥井 寛太

教室には、8人分の生徒の机。教室の後ろには、みんなで作業ができる大きな机もありました。この教室で、僕たちは毎日、授業を受け、クラス替えどころか班替えも知らず、6年間を過ごしました。これが僕が卒業した朝山小学校です。学校の中でも、一番人数が少ない学年だった僕たちは、男子4人、女子4人で何もかもやりました。8人で行事や集会の計画を立て、全校を動かします。大変そうですが、実は特に困ることもなく、逆に楽しさを感じながら過ごしていました。少ない人数だからこそ、協力することの大切さをたくさんの場面で学び、できることを精一杯行っていました。

そんな僕たちの教室には、朝読書の時、地域の方が読み聞かせに来てくださっていました。米作りの時期には一緒に作業をして下さいました。生活の中にたくさん、地域の方々とふれ合う機会があり、僕たちも校外へと出かけ、一緒に活動することが当たり前でした。僕たちの教室はいつも社会へと開かれていたのです。学校行事には、保護者席とは別に、地域の方々の席があり、僕たちを見守って下さいました。多くの場面で、小学校は地域との交流の場でした。学校は「子供と地域をつなぐ場所」であり、「地域とのつながりをつくる場所」なのだと思えます。

先日、このような記事を目にしました。「乙立小学校と朝山小学校が統合。」とても驚きました。同時に「いいのかな？」と思いました。「地域とのつながりをつくる場所」である小学校が、一つの地域からなくなってしまったのです。

僕たちが過ごした教室が頭に浮かびました。近年、朝山小学校も乙立小学校も児童数が減ってきています。統合することで学習が深まったり、行事が盛り上がりたりと良いことがあると思います。しかし、地域にとってはどうなのでしょう。学校とのつながりを今までと同じように保つことはできるのでしょうか。

僕は、生徒会長になった時、南中生徒会ス

ローガンを地域とつながる学校としました。地域の方々とたくさんの活動をする中で、中学生にもできることがあると気づいたからです。

南中では毎年、地域の方と全校生徒で「ゴミゼロ活動」という清掃活動を行います。草を取ったり、窓を拭いたりしながらの会話から、みんなの手でふるさとをきれいにしようという思いが強くなっていきます。その思いは、ふるさとを大切にしたい、そして、ふるさとのみんなを大切にしたいという気持ちとなって世代を超えてつながっていきます。

僕は今年の3月、ソフトテニスの全国大会に出場しました。出場が決まると、朝山コミュニティセンターの方が応援の看板をたてて下さいました。そのおかげで、多くの方に「がんばっているね。」と声をかけてもらいました。みんなに応援されていることを知り、とても嬉しく思いました。そして、今度は僕がみんな応援したいと強く思いました。

もし、統合によって学校の数が減るのならば、僕たち一人一人が今まで以上に、地域の活動に積極的に参加し、学校と社会の絆を強める存在になりたいと思います。

僕たちが過ごした8人だけの小さな教室。そこは、たくさんの人とつながる場所でした。そして今、中学校も地域と一緒に活動できる学校でありたいと思っています。なぜなら学校は社会へと僕たちをつなげてくれる場所だからです。

雲晴れ渡る 立久恵を

南の空に 仰ぎつつ

頬はばら色 睦まじく

みんな揃って 励みましよう

朝山小学校校歌の中にある「みんな」という言葉。今の僕には、教室や学校を超えた広い世界が想像できます。

皆さんの身近な人とのつながりは、どのようなものですか。ふるさとがいつまでも魅力的な場所であるためにみんなが手をつなぐこと。地域が求めることも僕たちが学ぶべきこともここにあるのです。



優 秀 賞

「ふつう」とは何か

松江市立湖東中学校
3年 阪本 華

「ふつう」って何でしょう。辞書のなかの「ふつう」とは、世の中にありふれているもの、または一般的なもののことを指します。「ふつう」の生活、「ふつう」の文化、「ふつう」の考え方…。私たちの身のまわりは「ふつう」であふれています。

では、「ふつう」だと決める基準は何でしょうか。それは、小学校低学年の頃、インドの人が経営するカレー屋さんに行ったことでした。肌の色などの外見から言葉まで、自分と同じような人としか接したことがなく、それが「ふつう」だと考えてきた私にとって、たくさんのインドの人がいて、初めて見るメニューがずらりと並ぶ店内は、新鮮であり、また怖さも感じる場所でした。とっさに私は、「外人！外人！」と何度も言ってしまい、店員さんにも親にも注意されました。それでも私は、自分のどこが悪かったのか分からず、嫌な記憶として自分の心に残っただけでした。

その当時、私は兵庫県に住んでいましたが、小学4年生になったとき東京に転校しました。転校してからの私は、常に周りの友達との違いを感じました。まるで、友達と私との間が薄いベールで仕切られているような、そんな感覚です。それは、たった一歩踏み出せば超えられる距離だったかもしれません。でもそれが、まだ幼かった私にとっては大きな重圧であり、不安を感じさせるものでした。特にみんなとの違いを感じたのが言葉、方言でした。関西弁独特の発音や言葉遣いでいつも笑われ、「直した方がいい」と否定されたりもしました。頑張ってみんなの「ふつう」に合わせようとする自分が、そして、ありのままの自分に自信をもてない自分がとても嫌でした。

そんな私の「ふつう」についての考えが変わったのは、中学2年生の頃、通っている英語教室に、ドイツ人の大学生パトリックが来てからです。パトリックは国籍や外見、価値観も違う私とも気軽に話してくれました。例えば、「日本と言えばクールなアニメだ。」と言うパトリックに対して私が、「アニメは嫌い。伝統的な日本文化じゃないし。」と言ったとき。日本のアニメが大好きなパトリックにとって、アニメを否定されるのはかなり嫌

なことだったはずですが。それでも彼は、「そうだね。」と私の考えを受け入れながら、自分のアニメに対する考え方を話してくれました。そんな彼に対しては、私と考え方が違うにもかかわらず、不思議と嫌な感じがしませんでした。そんなパトリックとの会話を通して、自分を認め理解しようとしてもらえることがどんなに嬉しいことなのか、私は身をもって知りました。

そして、私自身もパトリックのように、相手のことを認めながら接していきたいと思うようになりました。ただ、それは予想以上に難しいことでした。相手を認めるだけではなく、自分の考えも伝えていかないといけないからです。パトリックのように上手に人と接することはできないけれど、相手のことを少しでも尊重するだけで、お互いが認め合えるような関係になれるのだということに気づきました。

考えてみると、私たちの身のまわりでも、自分にとっての「ふつう」を押しつけていることがよくあります。自分が簡単にできることを人ができないと笑ってバカにしたり、自分とは違う少数の意見を無視したり…。皆さんにもそういうことをしたり、あるいはされたりした経験があると思います。でもそれは、相手にとっての「ふつう」を否定し、自分と違うものは認めない、自分のものさしですべてをはかろうとする態度につながるのだと思います。

最初の問いかけに戻ります。「ふつう」とは何でしょう。私の考える「ふつう」とは、一人一人の個性です。すべての人に共通する「ふつう」は無いのです。では、「ふつう」だと決める基準は何でしょう。「ふつう」が人によって違うなら、基準もありません。大切なのは、この二つのことを理解し、お互いを認め合うことだと思います。

これからいろいろなことを経験する中で、人との違いを強く感じることもあると思います。それを拒絶してしまうこともあるかもしれません。それでも私は、たくさんの「ふつう」を認め、多くの人と分かち合うこと、そして、自分らしくいることを大切にして生きていきたいです。



優 秀 賞

私の器

益田市立益田中学校
3年 上田 幸花

南アフリカの人権活動家ネルソン・マンデラ氏は「見た目は大切」という言葉を残しています。皆さんは誰かを見た目の違いで「この人は無理だな。」と感じたことはありませんか？ 自分とは異なる肌の色や髪の色だけでその人を判断していませんか？

でも本当に人は見た目が全てなのでしょう？

私は世界でも問題になっている人種差別について考えてみました。人種差別の中には黒人差別、アイヌ人差別、なんと日本人差別があるのを知っていましたか？ 私は知らなくてびっくりしました。

私も以前、外国に住んでいました。家族で出かけた時、日本語を話す私たちを見て、自分たちとは違うと分ると、まるで珍しいものを見るかのような目つきで私たちを見てきたのです。私は、自分たちがあたりまえとやっていることをしているのに見られていることが幼いながらとても不思議でした。

でも中には、私たちが外国人だと分かり困っていることが分ると、言葉は通じなくても優しく接して下さった方もたくさんいました。そうした方々のおかげで私たちは外国人として充実した生活ができたと思います。

でも世界では差別が原因で紛争が起り、罪のない人もたくさん亡くなっています。そのことはニュースで取り上げられることが多いので、気にかける人も少ないのではないのでしょうか。

そもそも私が差別について考えるようになったきっかけは、去年の冬、カナダにホームステイに行った時のことです。

私は昔から外国に興味があり、久しぶりに行くので、とても楽しみでした。

日本を発つ前に、私は父に、「ホームステイ先の家族、肌の色とか違うかもしれないけど、びっくりしないよね。」と言われました。そのとき、何も考えず、「うん。」とだけ答えました。

カナダに着き、ホストファミリーに会いました。その人たちはアフリカ系の家族で肌の色も黒かったです。分かってはいたものの、実際会ってみると、インパクトがあり、おおっと思ひ、少し怖かったのを覚えています。

でもそんな不安は必要なくとても優しく接してくれました。

夕ご飯の時です。テーブルにはたくさんの料理が並びその中には見慣れない食べ物があり

ました。それは薬の臭いがする茶色い食べ物でした。そのとき「この人たちってこんなものを食べているんだ。信じられない。」と私はびっくりしました。「こんなはずじゃなかったのに。」とカナダに来たことを少し後悔しました。

その夜、ベッドの中で私はふと父に言われたことを思い出しました。そして私は自分では気づかないうちにその人たちの生活を否定し、差別をしているのだと気づきました。

今の今まで何とも思っていなかった父の言葉が心に突き刺さったのです。

でもなぜ、差別というものが起きてしまうのでしょうか。それは人間一人ひとりの考え方が違い、そのことを受け入れられないからだと思います。

この世界には約70億人が住んでいます。

もし、その人たちが全く同じ考え、同じ外見、同じ能力をもっていたとしたら、けんか、争いも起こらず、これこそが平和というのかもしれない。

それに比べて一人ひとりの考え方や価値観が違うと争いやけんかが起る原因にもなります。でもそれは悪いことばかりではありません。一人ひとりが違うからこそ、自分では気づかなかったいいところや悪いところを相手がわかってくれることもあるのです。

実際私も価値観が違う人と出会うと近寄りにくいと感じます。しかし見方を変えればその人は自分にもっていないものをもっているということになります。そしてそれは、自分の幅を広げ、器を大きくするチャンスにもなります。

ですが、相手を受け入れるということはとても難しいことです。だからまずは自分の欠点や弱点と向き合い、それを受け入れることが大切だと思います。それができたら同じように相手を受け入れればいいのです。

「十人十色」という言葉があるように全く同じ人間はいません。

だからこそ、お互いが認め合い、受け入れることで差別というものはなくなると思っています。

私はまだ、誰でも受け入れられるほど大きな器は持っていません。だからこれからは、人の欠点や自分とのちがいを理解し、受け入れられるような器の大きい人間になりたいです。

最初に紹介したマンデラ氏の言葉には続きがあります。「見た目は大切・笑顔を忘れずに」さわやかな笑顔で差別を無くす力となり、共に生きていける一歩になると信じて。



優 秀 賞

言語の壁

雲南市立大東中学校
2年 永井 宏樹

「How do you get to school every day?」

「ああ……っと、Yes!」

間違えてしまった。一対一で話すのはやっぱり緊張する。今だって、「どうやって学校に毎日来ますか」と質問されて、「自転車 (bike)」か「歩く (walk)」と答えなければならないのに、「yes!」と答えてしまった。

これは1学期の英語の時間、クリスタル先生とのインタビューテストでの出来事です。「どうやって学校に来ますか」—「はい」。これでは会話とは言えません。

英語の文法が理解しづらい。英語の発音が難しい。これは英語と日本語の違いが大きいから生まれる、日本人が英語を苦手とする理由です。しかし、僕がインタビューテストで間違ってしまった原因は本当にこれなのでしょう。僕は違うと思います。自分と違う国で生まれ育ち、全く異なった言語を話す人との距離をあけてしまったからです。普段授業で友達と楽しく英会話をしていたはずなのに、いざ相手が外国人になると、「自分が話すことは本当に伝わるのだろうか。他の国の人から自分はどう思われるのだろうか。」と、どうしても相手との距離を作ってしまう。今思えば、あのときもっと相手との距離を縮めていれば上手に会話ができ、インタビューテストを楽しんでいたかもしれません。

今、社会では外国人観光客や、日本に移住してくる人が増えつつあります。例えば外国から来た人に道案内をしてほしいと頼まれたとき、英語やジェスチャーでしっかり伝えることができるでしょうか。おそらく多くの人が、自信がないと答えるでしょう。僕のように、距離を置いてしまい、十分な説明ができないのではないのでしょうか。十分な説明ができないと相手の人も困ります。

英語の教科書に「言語の壁を破ることが大切」という言葉が出てきました。サッカーの宮間選手の言葉です。「言語の壁」を破るためにはどうしたらよいのでしょうか。ただひ

たすら、英語を聴いて、英語を書いて、英語を読んで、英語の文法を覚えて……それだけでは破ることはできません。

そんなとき新聞の読者投稿欄にあった『お婆さんの英語力?に驚き』という投書を読みました。駅で観光客らしい外国人夫婦が自動販売機で乗車券の買い方が分からず困っていた。気づいた駅員さんが身ぶり手ぶりで説明し、夫婦は乗車券を買うことができた。電車に乗ると4人掛け椅子に座り、あとから乗ってきた腰のまがったお婆さんと笑いながら話していたというものです。これこそが「言語の壁」を破るためのカギだと思います。駅員さんのように「何かを伝えたい」という思いを、お婆さんのように「相手のことをもっと知りたい」「親しくなりたい」という思いを持つことが「言語の壁」を破ることにつながるのだと思います。

先日クリスタル先生と話をする機会がありました。突然、話しかけたのですが、先生は快く答えてくださいました。僕も自分から質問したりリアクションをたくさんしたりするよう心がけました。夏休みに旅行されたこと、僕の部活動のこと、高校進学のことなどいろいろな話をしました。話しながら「言語の壁」を破ることができたのではないかと感じました。伝えたかったことがしっかり伝わった実感があったし、自然に笑顔になれたし、何よりもっと話がしたいと思えたからです。初めは緊張しましたが、会話はとても楽しかったし、心が通じ合う素晴らしさを感じました。

2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催により、外国人観光客がこれからも増えます。日本がたくさんの国の人々を迎える時代に、僕たちは生きています。違う国同士の交流が必要とされる時代に僕たちは生きています。「何かを伝えたい」「相手のことをもっと知りたい」「親しくなりたい」という思いで、言語の壁を破って、違う国の人と心が通じ合う素晴らしさを実感していきたいと僕は思います。



優 秀 賞

本当の友達とは

邑南町立石見中学校
1年 奥村 芽唯

本当の友達って何だろう？中学生なら一度は考えたことがあるのではないのでしょうか。私もあることをきっかけに、本当の友達について考えたことがありました。

「絶交しよう」

小学生だった私は、当時一番仲の良かった友達に、この言葉をぶつけてしまいました。噂で、その子が私のことを嫌いと言ったと聞いたからです。

(あんなに仲良くしていたのに、陰で嫌いと言っていたなんて。一番の仲よしだって信じていたのに。)

裏切られた怒りで一杯になった私は、噂話を鵜呑みにしてしまいました。

(向こうが私を嫌っているなら、こっちから友達をやめてやる！)

そう思って、「絶交」という言葉を口にしました。しかし、そう伝えた後心に残ったのは友達をなくした悲しみと寂しさでした。冷静になって考えてみると、自分が勇気を出して噂の真相を本人に確かめていたらこんなことにはならなかったのかもしれない、もしかしたら嫌いだなんて言っていなかったのかもしれないのと後悔し、自己嫌悪に陥りました。そして深く反省し、友達に

「あんなこと言ってごめん。本当は言いたくなかった。」

と、心をこめて謝りました。するとその子はあんなにひどいことを言った私をこころよく許してくれたのです。このことがあってから、その友達とは今まで以上に仲が深まりました。そして私は、けんかして仲が悪くなるのは本当の友達なんかじゃない。けんかしてお互いを深く知り、より仲良くなれるのが本当の友達なんだと思うようになりました。

この経験以降、友達と付き合うときは、「何が本当か確かめること」、「自分の正直な気持ちを伝えること」の二つを意識することにしました。人から聞いたことではなく、本人の口から本当のことを聞き、自分の気持ちを正直に打ち明けることが時には必要だと思ったからです。そして許してもらってうれしかったあの気持ちを忘れず、自分も相手を許せるようになりたいと考えるようになりました。

それからしばらくたって中学校に入学しま

した。私のいた小学校は、全校生徒14人という小規模校。そんなたった14人の世界から、100人以上がいる世界へ。大人数との付き合いに慣れていないけれど、ほかの人たちとうまくやっていくことができるだろうかと不安を抱えていました。しかし、いざ中学校での生活が始まってみると、クラスにはいい人たちばかりで、すぐに打ち解けることができました。私が落ち込んでいると、それに気付いてこまめに声をかけてくれたりはげましてくれたりする友達もできました。時には相談に乗ってくれて、

「芽唯はひとりじゃないんだよ。私がいるよ。」

「大丈夫、いつでも頼ってね。」

と温かい言葉をかけてくれます。すぐに一人で思い悩んでしまう性格の私に、この言葉はとてもうれしいものでした。そして、そんな温かい言葉をもらうたびに、友達って本当に大切だなと感じるのです。

みんなと本当の友達になりたい。その為にも、以前考えた二つのことを意識して行動するようにしよう。そう頭で考えても、実際に噂の真相を確かめたり、自分の気持ちを正直に伝えたりすることは難しいことでした。小学生のときは、周りにいるのは長い付き合いの子ばかりで、お互いに言いたいことをいえるようになっていたけれど、出会って半年ではそうもいきません。もし嫌な噂が本当のことだったらどうしよう。正直に伝えて「なんでそんなこと言うの？」と思われたらどうしよう。想像したら怖くて本当のことをなかなか言い出せません。でも、そんな時は自分に問いかけてみるのです。

「私はみんなとどういう友達になりたいの？」

と。これから3年間を共にする友達と、その時だけが楽しければいいというような、上辺だけの付き合いがしたいわけじゃない。私を気にかけてくれる友達と、本音を伝えあえるような深い付き合いができるようになりたい。そう思うと少しずつですが、勇気がわいてきます。「何が本当か確かめること」、「自分の正直な気持ちを伝えること」この二つを大切にみんなと本当の友達になっていきたいと思えます。



優 秀 賞

世界に響け我らの安来節

安来市立第二中学校
3年 安部 直人

「どじょうすくい」—これは、日本全国的に知られている芸能の一つです。安来節の唄に合わせて踊る、この「どじょうすくい」に僕が深く関わるようになったのは、小学生のころでした。

兄が学校行事で安来節を披露しているのを見て、自分もやってみたいと思ったのがきっかけで、4年生になってすぐに安来節男踊りを習いはじめました。練習では、まず基礎から学びましたが、兄が踊る姿を見ていたからか、だいたいの基礎が身についていたようで、すぐに人前で踊れるほどの腕前になりました。

そして、習い始めて4ヶ月後の8月15日、僕にとって初めての大舞台となる「安来節全国優勝大会」がありました。そして、見事、優勝することができたのです。その大会で僕が覚えていることは、高齢の参加者が多い、ということでした。「安来節全国優勝大会」は、踊り・銭太鼓・三味線・唄などいくつかの部門に分かれ、3日間開催されます。僕が出場した「少年の部」にエントリーしたのは20名程度。優勝してうれしかったことよりも「このままでは安来節を継いでいく若い世代がいなくなり、やがて消えていくのではないか」という不安の方が大きく、いつまでも心に残りました。

安来節をいつまでも受け継いでいくために今の僕にできることはないだろうか—あれこれ考えた結果、「安来節をできるだけ多くの人に知ってもらおう」という考えに^{まっし}通り着きました。

安来二中では、毎年修学旅行で、安来市のPR活動の一環として、安来節男踊り・女踊り・銭太鼓を披露します。僕も去年、修学旅行の1日目に、奈良公園で100名以上の観光客を前に、男踊りと銭太鼓を披露しました。特に男踊りはリーダーを務め、取組の段階から安来の伝統を背負っていることを実感しつ

つ練習に励みました。

本番では、想像以上の人数の観客が集まり、その中には外国の方も多くいて、さらに緊張が高まるのがわかりました。しかし、しっかり踊ってみせようという気持ちが強く、本番中は緊張もほぐれて楽しく踊ることができました。

踊りの後、見てくださった外国の方から一緒に写真を撮ってほしいと頼まれました。そのときに、とてもよかったよ、と英語で声を掛けていただき、とてもうれしかったことが今でも忘れられません。言葉が通じなくても人を感動させることができる安来節を、僕は改めて誇りに思いました。

僕は将来、僕の得意な英語を生かした職業に就きたいと思っています。まだ具体的なことは決めていませんが、どのような職業に就いても、ふるさと安来に関わりたいと強く思っています。

3年生になり、1学期に職場体験がありましたが、僕は第一希望の「安来節演芸館」で体験活動をしました。安来に観光客として足を運び、安来節を楽しむために来館された方々の前で、安来節を披露するという、貴重な体験をする事ができました。この経験は、僕の安来節に対する想いを、さらに深めることになりました。

将来、たとえふるさとを離れて遠い国へ行ったとしても、ふるさと安来と、安来節を愛する心でつながっています。これからも、さらに踊りに磨きをかけ、英語もしっかりと勉強し、日本だけでなく世界へと安来節の調べを響かせていきたいです。



優 秀 賞

新しい自分になるために

奥出雲町立仁多中学校
3年 藤原 蘭

「もう、どうしたらみんなちゃんと吹けるんだあ。こないだの演奏もいまいちだったし…ねえ、お母さん。」

「何でだあかあ。もう、部活にも出たくないし。どうせやっても無理だし…。」

「うん、そうだねえ。」

「まあ、がんばるしかないよね。うん、私がやらんとね。」

私は帰宅し、荷物も下ろさずたすきもはずさず、せきを切ったように話し続けます。ただ母に話し、聞いてもらうことで、私は不思議と、前向きな気持ちになれるのです。

いつも今日一日のことを母に聞いてもらっていたのですが、突然、母が1週間ほど入院することになったのです。父に家のことを頼まれたときには「できるし！」と強気でいたのですが、自分のやりたいことができない。話をしたくても聞いてもらえない。私の心の中には、もやもやした気持ちばかりが膨らんでいきます。母に話を聞いてもらうことで、どれだけ自分がほっとしていたかということに改めて気づきました。母に支えられ、私は日々がんばることができていたのです。悩むことの多い私ですが、部活動での私はどうなのだろうと考えるようになりました。

吹奏楽部の部長として、私がリードしないと、という思いばかりが先走り、なんだかうまくいっていない雰囲気がありました。私も母のようにみんなを支えられる人になりたいと思いましたが、どうしたらいいか分かりませんでした。

5月、吹奏楽部の親子親睦会がありました。お家の方への楽器体験や演奏などの企画を、みんなで進行します。ばたばたと忙しくしている私に、父は一言こう言いました。

「おまえばかりしゃべっとるがな。」

え、何で？私がんばっているのに何がいけないの？心の中がざわつきます。家に帰り、ゆっくり考えました。私は部長だからと、全部一人でやろうとしていたのだと気づきまし

た。普段の私は、相手の思いを聞く前に自分の思いや考えを言うてしまうことが多かったです。だから周りは、一歩引いてしまうこともありました。みんなと一緒にやる。そのための役割分担や声かけをするのが部長としての私の仕事なのだと気づき、もっとみんなに声をかけるようにしました。

コンクール直前。焦りと緊張から、思いがすれ違えます。「もっと早くして!」「ちゃんと合わせて!」みんなにかける言葉も厳しくなり、プレッシャーから涙を流す後輩もいました。悩む私に、顧問の先生は、「北風と太陽だよ」と言ってくださいました。はっとしました。今まで、周りの気持ちを考える余裕もなかった私は、強い風を吹き付ける、強引な北風と同じだったのです。一方太陽は、旅人が自分から意志を変えるように働きかけます。私にはそれが足りませんでした。部員のみんなが自分の意志で行動したり練習したりすれば、心を一つに最後まで演奏できる。みんなを信頼し、思いを共有しながらやっていくことが大事なのだと気づきました。

だから、私は太陽のように温かく落ち着いた態度で、みんなと一緒にやってみようと思いました。相手の気持ちを考えながら話を聞いたり声をかけたりすると、部の雰囲気も前向きになってきたように思います。後輩がわからないところを自分から聞いてくれることも増えてきました。

今、やっと私は、なりたい自分の姿を見つけました。笑顔で気持ちのよい雰囲気を作れる人になること、それが私の目標です。

自分の目標とする姿は見つかったけれど、すぐになりたい自分になることは正直難しいです。以前の私が出てしまうこともあります。でも、私を支えてくれる仲間や先生、そして家族のおかげで、やっと見つけたなりたい自分です。目標とする姿に近づけるようさらに努力し、私の周りの人も、これから先出会う人も支えられる人になっていきたいです。



優 秀 賞

願 い

浜田市立浜田東中学校
1年 小寺 真羽

みなさんは障がいがある人に会ったことがありますか？障がいがある人を「障がい者」と言います。「障がい」と言ってもいろいろあります。足が思うように動かさない人、目の見えない人、耳の聞こえない人、また外見ではわからない障がいなど、種類も程度もたくさんあります。

僕の兄も障がい者です。いつも、脚に「装具」という物をつけて歩いています。装具は歩くための脚の機能を助けてくれたり、脚の変形を防いでくれたりします。兄は装具の点検や脚の診察のために、毎年大阪の病院に通っています。

僕が小学校低学年の頃のことです。兄が診察を受けている間、僕はなぜか装具をつけてみたくなり、兄の古くなった装具をつけてみました。そのままの姿で父といっしょに近くの店に歩いて行きました。そうしたら、通りすがりの人が小声で、

「なにあれ〜。」

と言っていたり、小さい子が、僕を指差して、「ロボットだ！」

と、不快な言葉をあびせてきました。僕にとっては、いつも見慣れている装具ですが、知らない人から見ると、「あれは何だろう」と思うのはあたりまえかもしれません。だから、僕は大阪の町でじろじろ見られたのだと思います。

それと同時に、僕は思いました。「兄は幼稚園に入園する時、小学校に入学する時、この何倍もの不快感を味わってきたのかなあ」「何か兄の助けになれないかなあ」と。

また、兄だけではなく、障がい者の多くがこのような不快感をずっと味わっているのだと思うと、とても切ない気持ちになります。

僕は最近、あるアニメ映画を見ました。その映画には障がい者とその家族が登場します。その家庭はとても暗く悲しく描かれていました。僕は「障がい者がいる家庭はこんな

ふうに使われているんだ……」と、少しさみしい気持ちになりました。

実際、僕の家庭はとても明るく、楽しく、笑顔がたくさんあります。兄とスポーツをして楽しむこともあります。よくすることと言えば、バスケットやキャッチボール、ゴルフなどをよくします。

誤解をしないでほしいのは、障がいがあることは、不便なことはあっても「不幸ではない」ということです。

障がいがある人が不幸になってしまうのは、差別をしたり偏見を持つ周囲の人がいるせいだと、僕は思います。

世の中には、いろいろな特徴をもった人がたくさんいます。例えば、背の高い人、手が大きい人、足が速い人、勉強が苦手な人、スポーツが得意な人、視力が低い人などいろいろです。「障がいがある人」も同じように考えてみてはどうでしょう。この地球上には、いろいろな人がいて、その人の特徴をおたがいが認め合い、おぎないあって、助け合うことが大切だと思います。

僕が一番伝えたいことは、障がいがある人もない人も「みんな同じ人間だ」ということです。だから障がい者を特別なものを見るような目で見たり、先入観をもって見ないでほしいのです。そして、困っている人がいたら、それが誰であっても手助けをしてほしいです。そうすることで、障がいのある人も、そうでない人も、誰もが暮らしやすい社会になればいいと思います。これが、僕の『願い』です。



優 秀 賞

家族がいることの幸せ

飯南町立赤来中学校
2年 小野 舞子

「赤ちゃん」と聞いて、みなさんはどんなことを思いますか？小さくて、柔らかくて、かわいくて、守ってあげたい存在。赤ちゃんを抱っこさせてもらった時、私はそう感じました。ちょうど同じ頃、何気なく見ていたテレビの特集番組で、初めて「赤ちゃんポスト」の存在を知りました。赤ちゃんポストとは、日本で唯一、熊本市にある慈恵病院が、「このとりのゆりかご」という名前で設置しているもので、実の親が育てられない赤ちゃんを預けるところです。

私は、自分の手に残った赤ちゃんの温もりを思い出しながら、あんなにかわいい赤ちゃんを、自分が産んだ大切な赤ちゃんを、手放さなければならないお母さんは、どんなに辛いだろうと思いました。

この赤ちゃんポストができて、今年で10年。これほど長い間続いているのには、きっと何か大きな意味があると思います、私は赤ちゃんポストについて調べてみました。

赤ちゃんポストによって、これまでに125人もの大切な命が救われたそうです。赤ちゃんを預ける理由は、経済的困難や未婚などさまざまです。どんな理由だろうと、かわいい我が子を手放さなければならないお母さんの悲しみを思うと、胸が痛みます。実際、赤ちゃんを預ける小さな扉から離れることができず、泣きながら立ち止まっているお母さんもいるそうです。

私はこれまで、家族で旅行に行ったり、遠足や運動会の日にはお弁当を作ってもらったりと、いろいろなことをしてもらって育ちました。だから、それが当たり前だと思っていました。しかし、預けられた子の中には、養護施設で育つ子もいるのです。施設には、友達や職員の方がおられますが、家族にしかできないことはたくさんあります。悩んでいる時は一番近くで支えてくれて、間違っただけをした時は私のためを思って厳しく叱ってくれるのはいつも家族です。そう考えると、慈恵病院で働いている方が、どの子も「家族」の中で幸せに育つ環境作りを大切にしておら

れる意味がすごくわかりました。

また、預けられた子の中には、自分は本当に親から愛されていたのかと悩み、傷つく子もいます。預けた親も、自分を責め続け、一生消えない心の傷を負うでしょう。

だから、預けられる子も、預けなければならない親も、これから少なくなっていくってほしいです。そのためには、一人で悩んで、赤ちゃんを預ける道を選ばないよう、周りの人が話を聞いたり、手助けしたりすることが大切なのではないでしょうか。今の私にできることは限られているけれど、そばにいる人の悩みに気づき、自分にできることは何か真剣に考え、行動できる人になっていきたいです。

「赤ちゃんポストがあるから、子どもを捨てる人が出るんだ」という批判的な意見がありますが、みなさんはどう考えますか？私は、今の社会には赤ちゃんポストが必要だと思います。もし、赤ちゃんポストがなかったら、追い詰められて赤ちゃんを虐待したり、殺したりする親もいると思うからです。実際にそういったニュースも目にします。赤ちゃんポストがあることで、多くの尊い命が救われ、また、自分の大切な赤ちゃんを苦しませる前に、「預ける」という道を選んだことで、お母さん自身も救われているのではないのでしょうか。

ただ、誰もが安心して赤ちゃんを産み、育てられる環境や、確かな人間関係が、これからの社会にはもっと必要だとも感じています。

私はこれまで、「家族」がいることが当たり前だと思っていました。しかし、けんかをしたり、一緒にご飯を食べたりする家族がいることは、当たり前のようで当たり前ではないのだと気づきました。何より、「お母さん」「お父さん」と呼べる人がいることは、とても幸せなことだと感じています。赤ちゃんポストについて知り、自分なりに考えたことで、そう思うことができました。

みなさんにも、大切な家族がいると思います。あなたも、「家族がいることの幸せ」について、考えてみませんか？



優 秀 賞

今 私にできること

出雲市立斐川東中学校
3年 高木 梨奈

「もうその話聞いたし！何回も言わんでよ。しつこい！！」頭では分かっているけど、ついこんな心無い言葉を、私は祖父にぶつけていました。

私の祖父は、数年前に認知症と診断されました。以前の祖父は、とても元気で、優しい人でした。私が幼い頃に書いた祖父の似顔絵や手紙など、全部ファイルに保管してくれていて、祖父は、そのファイルを取り出しては、嬉しそうに私の幼い頃の話をしてくれました。

ところが、祖父の様子が日に日におかしくなっていきました。私の顔と名前が一致しなくなったり、自分の年齢が分からなくなったりしてきました。これが認知症なのか。私は、戸惑いや苛立ちを覚え、祖父にきつく当たるようになりました。

その後、祖父の持病が悪化したこともあり、施設に入ることになりました。薄暗い部屋の中で、静かに、一点を見つめて時を過ごす祖父の姿を想像すると、胸が苦しくなりました。両親が祖父のところへ行こうと誘っても、「行ってもどうせ誰だかも分からないんだから、行くだけ時間の無駄。」

と言い、祖父のもとへ行くのを拒みました。

ある時、母がこう言いました。「認知症でいろんな事が分からなくなっているようでも、大切だったことや大事な人は、きっと覚えているから。」

私は、この言葉を聞いたとき、祖父が私を可愛がってくれた事が次々と頭に浮かび、無性に祖父に会いたくなりました。私が面会に行くと、施設の方が、「よく来たね。」

と、優しく言ってくださいました。そして、祖父に対しても笑顔で接しておられました。母も、食事などの世話をしながら、祖父に何気ない日常の出来事を話していました。そこは、私が想像していた薄暗い空間では決してなく、温かい空気が流れていました。きっと、祖父は、こうして温かく接してくださっている方の手のぬくもりを、今、感じているのだ

ろうと思い、祖父に冷たくあたってしまったことがとても恥ずかしくなりました。これからは、もっと会いに来て、祖父にいろいろな話をしよう、優しく接していこう。そう思っていた矢先、祖父の病状が急変し、今年の6月に他界しました。あの時、こうしていればよかった……という後悔は尽きません。

しかし、祖父のことをきっかけに、今まで考えもしなかった認知症について深く考えるようになりました。以前の私は、「記憶がなくなっただけでかわいそう。私は絶対、認知症になんてなりたくない。」と思っていました。今は、認知症は私も含め、誰にでも起こりうるのだと思います。認知症の方への接し方や介護の問題についても考えるようになりました。笑顔で献身的に介護をしていた母でしたが、今思えば、肉体的にも精神的にも大変だったと思います。

調べてみると、高齢の方が、自宅で孤独に認知症患者を介護している例も多く、介護をする側にも、支援が必要だと思いました。他にも、施設や介護福祉士の不足など、問題は山積みです。その一方で、現在は、医療技術が進み、今後はさらに高齢者が増え、認知症患者も増えていくと思います。少子高齢化の中で、近い将来、私たちが高齢者を支えていかなければなりません。今の私にできることは、もっと認知症や高齢化社会の問題について学び、学んだことを発信していくことだと思います。

また、祖父のことを通して、自分がいつか誰かの役にたちたいと思うようになりました。そんな思いで、この夏、私は、地域のボランティア活動に参加しました。私にできるもう一つのことは、少しでも社会に貢献していくことだと思います。

祖父や母、施設の方々のおかげで私は大事なことに気付かされ、この夏、小さな一歩を踏み出しました。小さな一歩も積み重なれば大きな力になると信じ、歩んでいきたいと思っています。



優 秀 賞

地平線

江津市立青陵中学校
3年 押越 広宇紀

みなさんは「違い」を前に、臆病になりませんか？肌の色や言葉の違い、考え方や習慣、文化の違いをすんなり受け入れることができますか？

僕は去年の夏、1か月、アメリカへホームステイに行きました。僕のホームステイ先はアメリカの真ん中にあるカンザス州です。都会のところもあったけれど、広い草原の向こうには、地平線が見えました。どこまでも続く地平線のすばらしさは、今も心に焼き付いています。ホストファミリーは5人家族で、彼らは僕をお客ではなく、家族の一員として接してくれました。たくさんの方を経験させてくれ、チャンスを与えてくれました。

ある日、ハンバーガーショップで、お母さんが僕に「注文してみる？」と言いました。僕は『僕の英語が伝わらなかつたら嫌だな。』と思いました。いざ注文してみると、店員さんは、笑顔で僕の英語を聞いてくれました。僕の英語が伝わったのです。その時は、とても大きな達成感がありました。これをきっかけにたくさんの方と話をし、この達成感を味わおうと思いました。『言葉の違い』は、僕が考えていた壁よりも高くありませんでした。

そして、アメリカでたくさんの友達ができました。僕は、自分のこと、日本のことを知ってもらうために自己紹介アルバムを作って、アメリカに持って行きました。そのアルバムの学校のページを見て、一人の子が言いました。「Do you go to school?」（きみ、学校に行っているの？）僕は、彼がなぜそう言ったのかを日本に帰ってから知りました。とても恐怖を感じました。日本では、考えられないと思いました。アメリカは、日本と違い義務教育ではありません。彼は学校に通わず、家庭を拠点に学習を行っている『ホームスクーリング』で教育を受けています。『ホームスクーリング』で教育を受ける理由は宗教

や貧困などいろいろあり、その中の一つが、銃問題です。アメリカは、銃の所持が認められている国のひとつです。過去に学校で銃事件が起きたこともあり、学校に行かせたくないという親の考えがあるのです。連れて行ってもらった学校には、『銃の持ち込み禁止』の標識がありました。それを見て僕は日本での安全な暮らしは当たり前ではないのだと思いました。

アメリカは『自由な国だ』とよく言われますが、僕が感じた『自由』は、『自立する』ということでした。ある朝、僕は寝坊してしまいました。アメリカでは、誰も起こしてくれません。自分で起きるのが当たり前です。どんな小さな子も日本の子どもより、はるかに『自立』していると感じました。

1か月はあっという間で、『まだ日本に帰りたくないな』と思ったほどでした。ホストファミリーと過ごす最後の日、お母さんが僕に「You are my family」と言ってくれました。僕には、もうひとつの家族ができたのです。僕は、アメリカに行って、たくさんの方の違いを感じました。そして、戸惑いながらもその違いを受け入れました。きっと僕のアメリカの家族も、僕の違いを受け入れてくれていたはずでした。

世界には、いろいろな国があり、考え方や文化が違います。いろいろな人がいて、いろいろな考え方があります。僕は、違いを理解するためには、まず、相手のことを知ることが大切だと思います。知ることによって、自分にはない新しい発見ができます。僕は、違いを感じて、さまざまな発見ができました。そして、違いを受け入れるためには、大きな器が必要です。僕は、たくさんの方の違いを受け入れることのできる大きな器を持った人になりたいです。アメリカで見たあの地平線のような広い器を。

平成29年度 少年の主張島根県大会開催要項 (第46回 島根県少年弁論大会)

- 趣 旨** 中学生自らが社会の一員であることを自覚し、責任感に目覚め、健やかに成長することが求められている。この「少年の主張島根県大会」は、明日を担う中学生が日常生活を通じ、日頃考えたり感じたりしたことを広く発表することにより、中学生の自立心を育てる機会とするとともに、視聴する親や大人の青少年健全育成に対する深い理解・関心、協力を求めようとするものである。
- 主 催** 青少年育成島根県民会議 島根県中学校長会 益田市中学校長会
独立行政法人 国立青少年教育振興機構
- 共 催** 益田市教育委員会
- 後 援** 島根県 島根県教育委員会 島根県警察本部 益田市
益田市青少年育成市民会議 島根県PTA連合会 益田市PTA連合会
- 開催日時** 平成29年9月27日(水) 10:30~15:30
- 開催場所** 島根県芸術文化センター グラントワ 小ホール
〒698-0022 益田市有明町5-15 (電話:0856-31-1860)
- 発表者** 中学校に在学する者(国籍は問わないが、日本語で発表する者)で、市郡中学校長会長より推薦された者。(市郡別の定員は別表のとおり)ただし、県大会開催市郡に限り定員より1名追加して推薦することができる。(発表順は別途事務局にて抽選)
- 実施方法**
 - 発表時間 5分程度(6分以内を厳守)とする。(400字詰原稿用紙4枚程度)
 - 発表内容 ①社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。
②家庭、学校生活、社会(地域活動)及び、身の回りや友達との関わりなど。
③テレビや新聞などで報道されている社会のさまざまな出来事に対する意見や感想、提言など。
以上、3つの中のいずれかに該当し、心からの思いや考えたこと、感銘を受けたことなどを、中学生らしい自由でユニークな発想で、飾り気のない言葉でまとめたもの。また、商業的な固有名詞の使用は極力避けるようにする。
- 審査員** 別に定める。
- 表 彰** 審査の結果、次の区分により発表者全員に賞状及び賞品を授与する。
島根県知事賞 1名(県代表) 島根県教育委員会教育長賞 1名
島根県警察本部長賞 1名 青少年育成島根県民会議会長賞 1名
審査員特別賞 2名 優秀賞 11名
- 発表者の交通費等** 発表者の交通費及び昼食は主催者が負担する。
- 発表者名簿・発表原稿の提出**

各市郡中学校長会長は、発表者名簿・発表原稿を9月11日(月)までに青少年育成島根県民会議事務局まで提出すること。(期限厳守、FAX・メールでもよい。)

▼青少年育成島根県民会議 〒690-8501 松江市殿町1 県庁青少年家庭課内
TEL:0852-22-6524 FAX:0852-22-6045
e-mail:nobinobi@shimane-youth.gr.jp
- その他** 県代表者の発表は中四国ブロック枠で発表原稿、録音したカセットテープ又は電子媒体で審査され、各ブロック代表者(2名)は、「第39回少年の主張全国大会~わたしの主張2017~」[主催:(独)国立青少年教育振興機構 平成29年11月12日(日)於:東京]に出場する。

平成29年度「少年の主張島根県大会」 市郡大会概要一覧

市郡名	学校数	出場枠	市郡大会 開催日時	市郡大会 開催場所
松江	19	2	9月7日(木)	(橋北地区) 鹿島文化ホール
			9月7日(木)	(橋南地区) 玉湯中学校
安来	5	1	8月25日(金)	伯太中学校
出雲	15	2	9月4日(月)	南中学校
雲南	7	1	8月31日(木)	吉田中学校
飯石	2	1	8月30日(水)	頓原中学校
仁多	2	1	8月30日(水)	仁多中学校
大田	6	1	9月6日(水)	第三中学校
浜田	9	1	9月6日(水)	石央文化ホール
江津	4	1	9月14日(木)	江津市総合市民センター
邑智	6	1	9月13日(水)	石見中学校
益田	12	3	9月4日(月)	グラントワ
鹿足	6	1	9月5日(火)	津和野中学校
隠岐	7	1	9月8日(金)	隠岐島文化会館

*開催地 益田市については1名追加

アトラクション紹介

益田市立匹見中学校

こんにちは。私たち匹見中学校の生徒は、美しい自然に恵まれたのどかな環境の中で、『団結・挑戦・鍛錬』をスローガンに、頑張っています。

毎週火曜日の放課後は、地域の方に指導していただきながら神楽を練習しています。夏休みには、姉妹都市である大阪の高槻市で毎年行われている高槻まつりの舞台でも演じてきました。たくさんの方に観ていただき、好評をいただいて帰ってきました。

今回ご披露する「大蛇（おろち）」は、八岐大蛇神話を題材として用いた石見神楽です。須佐之男命（すさのおのみこと）が大蛇と闘い、首を捕る場面は圧巻です。両者の闘いをじっくりご覧ください。囃子方の笛や太鼓、調子鉦（ちょうしがね）の響きも併せてお楽しみください。



平成28年度(昨年度)の受賞者

◆島根県知事賞

つなぐ傘

松江市立第一中学校 2年

林 英里

◆島根県教育委員会教育長賞

世倅プラン

津和野町立津和野中学校 3年

大羽 世倅

◆島根県警察本部長賞

父の姿

出雲市立平田中学校 3年

野津 僚祐

◆青少年育成島根県民会議会長賞

日常の中に

雲南市立三刀屋中学校 3年

錦織 歩香

◆審査員特別賞

壁の向こうに

ひとつのことばで

益田市立西南中学校 3年

江津市立江津中学校 1年

篠原由美子

土井菜々子

平成29年度 少年の主張全国大会出場者・審査結果

期日／平成29年11月12日（日） 13時～16時

会場／国立オリンピック記念青少年総合センターカルチャー棟大ホール

	ブロック	評価結果	県名	テーマ	氏名	学校名
1	北海道・東北		岩手県	得意なことを数えよう	おの であ ゆ き 小野寺悠来	おうしゅう し りつがしみずぎわちゅうがっこう 奥州市立東水沢中学校
2			宮城県	配膳台のプロフェッショナル	もりかわ 森川まどか	せん だ い し りつまくらがわちゅうがっこう 仙台市立桜丘中学校
3	関東・甲信越静岡		千葉県	友達ごっこ	すずき か のん 鈴木 華祈	かつうら し りつかつうらちゅうがっこう 勝浦市立勝浦中学校
4		内閣総理大臣賞	新潟県	仲間を守る一言	ひらさわ こう め 平澤 幸芽	にい がた けん りつつばめちゅうとうきょういっく がっこう 新潟県立燕中等教育学校
5		国立青少年教育振興機構理事長賞	群馬県	私は、私の足で生きていく。	もり た まな み 森田 愛美	おお た し りつみなみちゅうがっこう 太田市立南中学校
6	中部・近畿	審査委員会委員長賞	愛知県	たった一言が言えなくて	あらしま あや の 荒島 彩乃	がまごおり し りつがまごおりちゅうがっこう 蒲郡市立蒲郡中学校
7			奈良県	毎日が勤労感謝の日	こ やま あい か 小山 愛桂	な ら けん りつせいしゅうちゅうがっこう 奈良県立青翔中学校
8			京都府	ハーフ？ダブル？本当の私は？	なかやま 中山ルーナ	きょう と し りつかす が おかちゅうがっこう 京都市立春日丘中学校
9	中国・四国	文部科学大臣賞	島根県	カラフル	い で がみ ぼく 井手上 漠	あ まちょうりつ あ まちゅうがっこう 海士町立海士中学校
10			岡山県	その向こうに	こく ぶ ゆう か 國府 優花	おかやま けん りつくらしきあま き ちゅうがっこう 岡山県立倉敷天城中学校
11	九州	審査委員会委員長賞	鹿児島県	本当の平和へ	まつもと かず ま 松元 一真	か こ し ま し りつさかもとちゅうがっこう 鹿児島市立坂元中学校
12			福岡県	いかせ命	わ に 和仁あやね	く る め し りつ た ぬし まるちゅうがっこう 久留米市立田主丸中学校

仲間を守る一言

新潟県立燕中等教育学校
2年 平澤 幸芽

「Aちゃんをはぶろうよ。」

もし、友達にこう言われたら、あなたは本当の自分の意見が言えますか。私は言えませんでした。だから私は、この主張をします。かつてのAちゃんみたいな人が、少しでも減ることを願って。

「Aちゃんをはぶろうよ。」

仲の良い友達から、突然言われた一言だった。私には、Aちゃんを嫌う理由がなかったから、頭の中が疑問だらけだった。「昨日まで、仲良くしていたのに、何でいきなり？」しかし、その疑問は口に出せないまま、なんとなくうなずくだけで、のどの奥に沈んでいった。

次の日から、身近な友達の全員がAちゃんを無視し始めた。Aちゃんが近づいてくると離れ、Aちゃんの話をするように誰かが話を始め、Aちゃんをわざと一人にした。だんだんとAちゃんから笑顔が消え、やがて近づいてこなくなった。周りの友達は笑っていた。

私は「こんなことをしてはいけない」「こんないじめだ」と分かっていた。目の前で繰り返される残酷な光景に対して、分かっていたが、声が出なかった。これを言ってしまったらどうなるのだろうか。Aちゃんともう一度仲良くなれるのだろうか。それとも、次は自分がはぶられるのだろうか。自分がはぶられることは、絶対に嫌だった。だから私は、周りの人に合わせて、意味もなく笑った。自分の意見が言えないまま。Aちゃんを避け続けた。

それからというもの、友達という存在が、「楽しい人」から「疲れる人」へと変わっていった。もう一緒にいるのも疲れてしまい、面倒だった。けれど、嫌われたくないから、とりあえず何でも「うん」と答えた。私はそんな「友達」が嫌いだった。しかし、もっともっと嫌いな人がいた。それは自分自身だった。はっきりと「良い」も「悪い」も言えない自分が嫌いだった。ある夜、ノートに真っ赤な文字で、「大っ嫌い、大っ嫌い。死ぬ死ぬ死ぬ……」と書き殴った。そのページの一番上に、はっきりと「自分なんか」と書いていた。

そんな中、インターネットを開き、画面に

目を通してしていると、私はある言葉と出会った。「過去と他人は変えられないが、未来と自分を変えられる。」

それを見た瞬間、ドキッとした。まるで今の状況を理解して、私のために書かれているかのような言葉だったからだ。その時やっと気づくことができた。自分が変わらなければならないということ。私が言うべき言葉は「うん」という「自分を守るための言葉」ではなく、「こんないじめだよ。もうやめよ!」という、「大切な仲間を守るための言葉」だったということ。

「ねえ、もう、やめよ。」次の日、あの言葉に背中を押され、勇気を出して、私は友達に伝えた。「……うん。」少し間を置いて、友達は私の言葉を受け止めてくれた。そして、みんなでAちゃんに謝った。

今年6月、県内の中学2年生がいじめを苦にして、自らの命を絶った。同じ年の子が、私が想像もできないくらいの、痛みや苦しみを抱えて命を絶ったであろうことにショックを受けた。それと同時に、もしAちゃんを避け続けていたとしたらと考えたとき、私は恐ろしい気持ちになった。誰も、彼を守ってあげられなかったのだろうか。周囲の人たちはみな、私のように、救いの一言を飲み込んでしまったのだろうか。「やめようよ。」その一言は、命が失われてからでは遅い。いじめは人を死に追いやる。だからこそ、周囲の態度は、それに対して責任をもたなければならないと思う。

私は、今では仲の良い友達にも「良い」、「悪い」と自分の思いを伝えている。安易に同調することだけが、友達ではないからだ。それから、「なんでもいい」という言葉はあまり使わないようにしている。「なんでもいい」は自分の意見を言うことを放棄していることであり、無責任な態度だからだ。今でも時々、「○○ちゃんってうざくない？」そんな言葉を耳にする。でも私は、「私はそんなことないと思うよ」と、責任をもって、自分の意見を言うようにしている。その一言が、周りの大切な仲間を守る一言になるからだ。

あとがき

平成29年度「少年の主張島根県大会」の報告書をお届けします。本年度の県大会は、益田市の島根県芸術文化センターグラントワを会場に行われ、県内13市郡から選抜された17名の皆さんが出場しました。

テーマとしては、それぞれの多様性を認めることの大切さ、自分探し、心の問題に取り組んだもの、また、地域とのかかわりや海外でのホームステイを通して感じたことなどがあり、それらが思いをもってきちんと自分の言葉で表現されていました。

全体的に非常にレベルが高く、審査員の白熱した議論により審査され、結果は僅差でした。

皆さんには、今回の経験を糧として、これからの人生に活かし、ますます豊かな心を育んでいていただきたいと思います。

また、今回県知事賞を受賞された発表は、中国・四国ブロックの代表にも選出され、全国大会で「文部科学大臣賞」を受賞されました。大変喜ばしく、心から敬意を表します。

この報告書には、県大会で発表された17作品と、全国大会での最優秀作品を掲載しています。多くの皆さんに読んでいただき、発表者の思いが一人でも多くの皆さんに伝わり、青少年育成に各分野で活かされることを願っています。

平成29年12月

平成29年度「少年の主張島根県大会」

青少年育成島根県民会議 事務局

平成29年度 少年の主張島根県大会報告書

平成29年12月発行

編集 青少年育成島根県民会議

〒690-8501 島根県松江市殿町1番地（県庁青少年家庭課内）

TEL 0852-22-6255 FAX 0852-22-6045

<http://www.shimane-youth.gr.jp/>

E-mail : nobinobi@shimane-youth.gr.jp

Facebook 「青少年育成島根県民会議」



青少年育成島根県民会議キャラクター
ハピネス